

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第935号 平成27年5月25日

アール・ブリュット

近年、「アール・ブリュット」への関心が高まって来ているように感じます。人によっては「アウトサイダー・アート」と呼ぶ人もいますが、いずれの場合も、既存の価値観に囚われない芸術活動から生み出された作品である事に変わりはありません。

「アール・ブリュット (ART BRUT)」というのは、直訳すれば「生の芸術」という事になりますが、この言葉は、フランスの画家ジャン・デュビュッフェ氏が提唱したもので、正規の美術教育を受けていない人が自発的に創作した作品を指しています。

デュビュッフェ氏は、第2次世界大戦中から精神病患者や霊媒によるデッサン等に興味を抱いていたようです。そして、1945年夏、作家のジャン・ポーラン等と共にスイスを旅行した際、旅先で精神病患者等が創作した数々の作品に出合い強い印象を受けた彼は、これらの作品を「アール・ブリュット」と名付け、収集活動を始めます。その後、1947年には、ルネ・ドルアン画廊の地下で「アール・ブリュットの家」を旗揚げし、それまでに収集した作品や資料を展示しています（嘉納礼奈「アール・ブリュット—そこにあったものの受容史」から）。

デュビュッフェ氏は、「アール・ブリュット」という言葉を選択した理由について、「私は〈無名の芸術〉よりも〈生の芸術〉という言葉を選びました。職業的作家の芸術の方がずっと奥が深くて明晰である、とは思えないからです。むしろその逆です。こんな事をいうと混乱を招くかも知れません。私は駄目なものを弁護するとみられてしまうかも知れません。どうしてあなたは、原石のままの金は、偽の金よりも偽物とお書きになるのですか。私は金時計の側よりも天然のままの金の方が好きです。生の、温かい、搾りたての水牛のミルク万歳」と書いています（末永照和著「評伝ジャン・デュビュッフェ」から）。

岡本太郎氏は、彼の著書「今日の芸術」の中で、出来合いのものによるのではなく、引き出してこなければならぬものは、実は、自分自身の精神そのものであり、そこが芸術の根本であると指摘すると共に、「ありのままに出るということ、まして、それを自分の力で積極的に押し出して表現しているならば、それは決して恥ずかしいことではないはずです。見えや世間体でじぶんをそのまま出すということをして

はばかり、自分にない、別な面ばかりを外に見せているという偽善的な習慣こそ非本質的です」と述べています。

「ありのままの自分を、出来合いのものによらずに積極的に押し出す」というのは、まさに「アール・ブリュット」の考え方そのものだと、私には思えます。つまり、「アール・ブリュット」というのは、芸術はこうあるべきといった従来型の価値観や評価基準に対するアンチテーゼといった面があり、それが多くの人の心を惹き付けているのだと思います。

私が初めて「アール・ブリュット」ともいうべきものに出会ったのは、今から15年程前、東京事務所長をしていた時です。

母親と一緒に一人の若者が私を訪ねて来ました。その青年は知的障害者で、母親がいうには「息子はウミガラスに興味を持っていて、いつもウミガラスの絵ばかりを描いており、近く、その取材のために北海道に行ってきます」との事でした。

右の絵は、その際に頂いたものですが、当時私は、「アール・ブリュット」というものに対する知識が全くなかったために、拙い絵だなという感想しかありませんでした。しかし、今、改めてこの絵を見れば、技巧的には稚拙であっても、彼の世界観が素直に表現されており、眼差しの優しさが伝わってきます。



その後、母親は病気で亡くなってしまいましたが、今も、この青年とは年賀状のやりとりをしています。

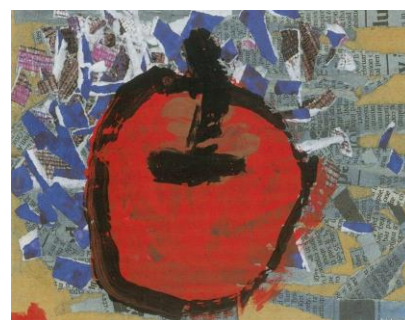
先日私は、札幌市内で「ペングアート」という児童ディサービス事業をされているト部奈穂子さんとお会いする機会がありました。

ト部さんは、発達障がいのある子ども達を対象に、アートを通してコミュニケーション力や自己肯定感を高める療育を提供するという活動をしており、現在は、子ども達だけではなく、成人を対象にしたサークル活動も行っているとの事です。

私は、その活動を通して生み出されている作品は、まさしく「アール・ブリュット」そのものだと感じています。

ト部さんもその事を認識していて、障がい者の方達の作品をもっと多くの方々に知っていただきたいと、展示活動等を精力的に行っています。

アーティストで東京芸術大学准教授の中村政人氏は、一つの作品が「アール・ブリュット」という特別な存在として評価されるためには、「純粹」「切実」「逸脱」という3つのキーワードがあると述べています。そして、



ペングアート利用者の作品(1)

「純粹」という事については、人間の尊厳を感じる崇高な精神性や豊かな心であり、それは、大衆的、商業的、作為的な行為とは対照的で、その純度が高ければ高い程研ぎ澄まされた人間力を感じる、と中村氏は述べています。



ペンアート利用者の作品(2)

また、「切実」という事については、生きて行く事と同様に、作らなければならない行為や表現の質をいい、「逸脱」という事については、「純粹」な精神力を抱き、かつ、「切実」な表現活動を続けている人が創り出す様々なモノや表現活動が、それまでの状態から他に類を見ない存在となった時をいう、と中村氏は述べています。

「極限的で時限的な状況に追い込まれた時」や「どうしてもなく行わなければならない時」に生み出された表現は、生きる事そのものだと私も感じます。

中村氏は、「純粹」で「切実」な行為や表現が「逸脱」した存在となった時、私はそこに「芸術」としかいいようのない状態を感じ取る、と述べていますが、「アール・ブリュット」の核心は、まさにこの「逸脱」にこそあるという事だと思えます。

嘉納礼奈氏はまた、「アール・ブリュット」に関して、「美の基準や真実は角度を変えれば全く異なる知性や美が発見できる」と述べています。「アール・ブリュット」の作品が既存の価値観を打ち壊すものとして存在するとすれば、それを鑑賞する我々自身が自ら固定観念を払拭し、自由な精神の下で羽ばたく事が必要なのだと、改めて感じているところです。

(塾頭：吉田 洋一)